

16年からすべてのがん患者の情報を国が集計する「がん登録」が始まっています。

がん登録による公開データは2018年が最新です。20年のデータが公表されるまで時間がかかりますが、19年に比べて患者の数が減ることは間違いないと思います。

すでに紹介しましたが、日本一の患者数を誇るがん研有明病院（東京・江東）では2020年の胃がんの手術件数が19年より3割以上も減っており、とくに早期がんの手術の減少が顕著です。

同院の新規患者数は、20年は19年と比べ、19%の減少でした。とくに、人間ドックなど検診施設からの紹介患者数は33%も減少していました。

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

コロナ下、患者減でも死亡数増

見されにくくなっています。20年のがん患者の数は大きく減ることになるでしょう。

もちろん、がん患者数の減少は見かけ上の現象にすぎません。がん罹患者数は現在、男性56万人、女性は42万人程度ですが、国立がん研究センターの長期予測によると、20年後には男性で64万人、女性では53万人と推計されます。

なります。近い将来、がんが激増すると予想されます。

一方、昨年は11年ぶりに総死亡が8千人以上減少しました。コロナ対策で肺炎やインフルエンザが激減しただけでなく、心臓病や脳卒中も減っています。高齢化で増えつづける老衰以外の死因のなかで、増えているのはコロナとがんだけです。

がんによる死亡がふえているのは、治療の延期や自粛によって、進行・末期がんが増えていることが背景にあると思います。

住民がん検診を日本でもっとも手がけている日本対がん協会の調べでも、昨年の検診受診者は3割以上減っていますから、当然だと言えます。早期がんだけでなく、かな

り進行してもがんは症状を出さないことが普通です。がん検診、人間ドックの減少の他、かかりつけ医への受診も減っており、他の病気の経過観察中に見つかっていたがんも発

見られるのは男性で13%、女性ではなんと3割も増加すると見込まれているのです。検査が減って診断が遅れている多くのがんも、やがて症状を出すと発見されるように

がんの患者数は減り、死亡数が増える異例の事態。一時減った患者数も、やがて増えることは間違いありません。

（東京大学特任教授）